私の憧れの女性　　6219037

身近な人のインタビュー記事を書くと授業で言われたときにインタビュー相手として真っ先に思い浮かんだのが、田中佐和子さんだった。彼女は私の通う田中歯科クリニックで矯正医をされている。女性の医師というのが私には新鮮で、矯正の治療をしてくれる先生はいつもかっこよくて先生の髪型とか見た目も好きで前から憧れの女性だった。「私でいいの？」と先生は言いながらインタビューを受けていただけることになったときはとても嬉しかった。

先生のご両親、特に母親が歯科医をしていたことが先生が歯科医を目指したきっかけだった。ものを曲げるなど技術的なことが昔から好きだったため、ただの歯科医ではなくて矯正医を目指そうと思ったそうだ。高校生の頃には針金をハート型に曲げたりしていたらしい。矯正医を目指すなんてこうやって文字にすれば簡単に書けるけれどそう簡単ではない事を私はこのインタビューを通じて知った。先生のような矯正の認定医になるには大学の歯科部で六年学びさらに臨床研修医を経た後、大学の矯正歯科で基礎修練二年、指導医の元で最低三年勉強するという本当に長い道のりがある。あまりにも道のりが長すぎて私には想像もつかない。自分なら途中で逃げ出してしまいそうだと思った。どうしてそんなに頑張れたのかと尋ねると先生は「確かにね。どうしてそんなに頑張れたんだろうね。でも歯科部は一般的な大学の学部と違って就職できるところ、道が決まっているから途中で止めたら何にもない人になってしまうからね。」と答えた。途中で止めたらそこまでの何年かで積み上げてきたものが全て無駄になってしまう。何年もの長い道のりを歩ききらなければ矯正医になることは出来ない。だからこそ矯正医を目指して大学の歯科部を進路に選択することはとても勇気のいることだと思う。私だったらたとえそれが自分の就きたい仕事であってもその仕事に就くという夢を叶えるのに何年もの長い道のりがあると知ったら、その夢に向かって長い道のりへ足を踏み出す勇気が持てるのかなと考えた。長い道のりを歩ききって今矯正医をしている先生はやっぱりすごくてかっこよくて強いと思う。

先生には今、五歳になる息子さんがいる。医学界は女性が少なく産休や育休など女性の制度において、先生は一般的な社会より二十年は遅れていると感じているそうだ。その上矯正治療は一人の患者さんを継続して二年ほど看たりするため、さらに産休や育休が取りづらいのかもしれない。先生は出産の時に勤めていた大学病院を全て辞めたそうだ。産休や育休があれば欲しかったし、そういうところが女性医師ならではの大変さだと感じたそうだ。仕事の大変なところを聞いたときにも先生は、矯正の仕事そのものの大変さよりも仕事が遅い時間までだったりして子供と長い間一緒にいてあげられない事が子供に申し訳なく思うと言っていた。私も両親が自営業をしていて帰りが遅かったり休みが少なかったりするから先生の気持ちがなんとなく解る気がした。この前私が治療で田中歯科クリニックを訪れたときにも先生は待合室で息子さんに絵本を読んであげていた。きっと先生はそんな診察と診察の間のほんの短い時間でも息子さんと過ごしてあげられる時間を大切にしている。子供との時間を大切にする先生は素敵なお母さんだと

思う。今まで生きてきた中で一番幸せに感じたのは息子さんが生まれたときだという。子供が出来ると自分ではなく子供中心の生活になってしまうけれど、でもやっぱり子供がいてよかったと思うし子供がいる生活が今は幸せだと先生は笑顔で話してくれた。そんな先生は先生としてだけじゃなくて女性としても輝いているように見えた。

今回のインタビューで先生のことを今までよりも少し多く知って私が先生に憧れている理由が少しはっきりとした気がした。私は先生の見た目だけじゃなくて一人の女性としてお母さんをしている姿や、矯正医になる夢をかなえるために普通の人よりも大変な進路を選択し、大変な道のりを歩ききって自分の夢をかなえている姿、その強さに憧れているのだと思う。私は先生の患者の一人であって先生の何を知っているわけではきっとない。けれど先生のそんな姿に憧れているということは確かで変わらない。もっと先生のことが知りたくなった。私も先生のような女性になりたい。

２０１９年4月２７日

田中歯科クリニック診察室にて